第一章
死んでお写真になったんよ

道綱正美ちゃん（4歳）・絵

20歳から59歳の犠牲者1,718世帯を1軒1軒訪問して、震災遺児を捜すローラー調査を2月15日に開始。

3月16日までに、のべ881人のボランティアが504人の遺児を確認した。行政にはできない成果だ。

ともだちできたヨ

小学四年　酒井隆司

学校でいっぱい友だちができたよ、おかあさん。前の学校ではできなかったのに、いろいろな、友だちができたよ。毎日、二時間めが終わった十五分休みに、おにごっこをやってる。この前はげきもやった。げきの練習の時は、たいへんだったよ。

少し前は、ちょっとおもしろいことがあった。その時は学校のかえりだった。かべがいっぱいならんでいる所を通っていたら、木村君がいきなり「このかべ、けってみようか」といった。ぼくは「だめ」といったけど、木村君はむししてボゴンとけった。それで、ボロボロかべはボロロと音たてて、ちょっととれた。それで木村君が「とれちゃった」といって、みんないっしょにげました。

それから学校でハプニングがあった。けんかがあった。それは、おかばやし君が、もんくを、すみ君にいったから、けんかになったのだ。それですみ君がおこってなぐったからである。先生がひきとったから、よかった。

天国のお母さん、これからも時々いろいろなことをお手紙にかきますから、よんでね。毎日、友だちとたのしくあそんでいるから、しんぱいしないで。

死んでお写真になったんよ

主人の兄夫婦が幼い一人娘を残して亡くなりました。

私たちのほうは、揺れはひどかったんですが、家の中のものが多少割れたぐらいで、向こうはこんなにひどいことになっているとは、テレビを見るまで知りませんでした。

兄嫁の弟さんとお父さんが様子を見に行って、家がすっかりつぶれているっていうんで、主人の実家のほうに連絡が入ったようです。この子は、一人取り残されているのを近所の人が見つけて、避難所に一緒に連れていってくれたみたいです。その時のことは、この子の中でかなり混乱があるようで、一人で二階で寝てたと言ったり、みんなで一緒に寝てたと言ったり、よく覚えていないようです。

二人とも亡くなっていますから、どこで面倒をみるかということでは、親戚中でいろいろ話し合いました。結局、私たちが子どもがなかったので預かることになったんです。

前から神経質な子だったものですから、来た当初は荒れて大変でした。人形で楽しそうに遊んでると思っていると、その人形をバンとぶつけて悪者をやっつけたんやと言ってみたり。

「死んじゃってお写真になったん」

突然、なんの脈絡もなく言ってみたり。夜泣きもずいぶんありましたし、特に一人にされる

のが恐いみたいで、もう手がつけられないぐらいに泣くんです。

この間も、おもちゃを片づけなさいと言ったら、

「こんなんやったら、ここに来んほうがよかったわ」

心が傷ついているんやなあと、どうしようもなくかわいそうになりました。

子どもが小さい場合、親が亡くなっても、旅行に行ってるとか、遠いところに行ってるとか、言いきかす人もいるみたいですが、私たちはきちんと理解できる範囲で言ってあげることを選びました。

それからは少しずつですが、落ち着いてきまして、やっとこの頃は、私たちにも甘えてきます。主人とお風呂に入ったとき、髪の毛が濡れてベタッとなったらパパとそっくりやって喜んで、それからしょっちゅう一緒に入るようになりました。

四月から幼稚園に行っています。初めは先生が恐いって言うときもあったんですが、お友達ができたり、先生にも甘えることができるようになって、今は楽しいみたいです。

両親の話はポロッと言うことがあります。ママの話が多いですね。亡くなったってことはわかっているんでしょうけど、自覚してわかってくるのはこれからでしょうね。まあ、子どものうちはできるだけ楽しい時間を過ごせたらいいんじゃないでしょうか。

姉さん夫婦のようにはできないと思いますが、できるだけのことはしたいと思ってます。

わが子を抱えて埋まったまま、炎にのまれた妻

震災時、妻と下の子は里帰りをしていました。私は上の子と自分の実家に帰っていて、ちょうど十七日に二人を車で拾って帰ることになってたんです。私がいたところは大した揺れではなかったので、テレビをつけてびっくり、妻の実家は大変な被害にあってたんです。

とるものもとりあえず、上の子を親に預けて車で飛び出したんですが、渋滞でなかなか進まず、いても立ってもいられなくて、途中で車を投げ出して歩きました。それでも瓦礫がすごくて、その日はたどり着くことができませんでした。

翌日からバイクで避難所を捜し回りましたが、見つからず、夕方になってやっと妻の姉と会えました。妻とまだほんの赤ん坊だった下の子は、埋まったまま、炎にのまれたそうです。消防隊の人たちが掘り出してくれたのは地震から二日後でした。

警察では焼死ということでしたが、実際は圧死してから焼かれたのか、はっきりしません。二人とも即死だったらと思っています。

私たちの自宅は無事でした。中のものはめちゃくちゃですから、片づけをしなくてはいけないんですが、思い出が多すぎてなかなか手がつけられなくています。

玄関を開けて、スリッパを見ただけで、ああ、もう帰ってくるんちゃうか、なんでおれへん

のやろと思ってしまいます。

現在の収入はほとんどなく、仕事の再開もめどが立っていません。妻がいれば、何か新しいことをやろうかという気も起きるのでしょうが、がんばらなくてはと思いながらも、気力がわいてきません。

義援金は建物に被害がなかったので、父子家庭になっても出ませんでした。また上の子が在日朝鮮人の学校だったために奨学金も対象外です。

この手の扱いは、慣れっこになっていて、それほどショックではありませんでした。だからあしなが育英会が奨学金を申し出てくれた時は、かえって驚いたぐらいです。

ボランティア組織で手を差し伸べてくれたのは、あしなが育英会だけでした。差別なく扱ってくれて、いろいろな意味でどんなにうれしかったか、言葉では表現できません。

関東大震災の時のことが引き合いに出されて、今度も朝鮮人が放火したなんていう噂があった時は、七十年前の悲劇がまた繰り返されるのかとぞっとしました。でも、在日朝鮮人学校が、震災後すぐに国籍に関係なく近隣の人たちに校庭を開放し、ボランティアが炊き出しなどで助け合ったという話が報道されたせいでしょうか、周りの人たちはとても冷静でした。

おまえらばっかりええのん

父親を亡くして、一番ショックを受けたのは、お父ちゃん子だった就学前の五番目の子です。最後までお父ちゃんに抱きついて離れようとしませんでした。

火葬場で、最後のお別れにと子どもたちが順番に水をかけてあげたんですが、五番目の子がそれをしたあとで、どこかから水を持ってきて、黙々といろんな花に水をやっていくんです。

なんだかあぶない感じで、気が気じゃなかったです。精神的におかしくなったら困ると思って、ずっとあとをついて回ってました。でもあの時だけで、ほっとしましたけどね。

今は、みんな泣くこともなくなりましたし、自然にお父さんのことも話さなくなってきました。でも三番目の子は、もう小学生なんですが、私と一緒じゃないと寝られなくなりましたね。それまではちゃんと一人でできてたお風呂もトイレも誰かと一緒じゃないとダメなんです。

四番目の子は、どこででも寝るし変化がないと安心していたんですが、この間なんか、あの鉛筆がないから学校に行けんとか、言い出して、何をしてもダメ。一つのことが気になったら、ずーっとそこから離れられないんですよ。

当然でしょうが、そんなふうに、どこかしら地震のショックが尾を引いているところはあります。

今は自宅に戻ってきてますけど、当初しばらくは避難所にいました。

救援物資とか食料が届けられるでしょう。特に食料は、先生たちの好意で、子どもたち優先で配られてたんです。

そしたら、だんだんと年輩の人達から、

「おまえらばっかりええのん」

と文句が出るようになり、いやな思いをしたので、手を出さないようにしました。かわりに買い出しにいって買ってきたパンを食べていると、今度はそれにも嫌みを言ってくる……。なんでそこまでいやしくならなあかんのかな、大人は醜いと思いましたね。

小学校はとにかく寒くて大変でした。最初はストーブもあったのですが、余震ですぐストップしてしまいますし、コンクリートの建物で、まったく火の気もないから、毛布を三、四枚かぶっても、底から冷えてくるんです。

子どもたちは、そんな中で何日間も寝てましたから、身体の具合も悪くなりますよね。下痢だの吐き気だのがひどくて、夜中に病院に連れていったこともありました。脱水症を起こした子もいます。

着るものも、持ってきたもの全部汚して、洗濯もできませんから、においがすごくて、捨てるしかない。ズボンもなくなって、紙おむつを使ったり、もう、大変でした。

おりこうにしてたら、ママ帰ってくる？

その日はたまたま息子夫婦と孫は、被害がひどかった嫁の実家に行ってたんです。たまたま息子が早出だったものですから、朝早く出かけたらしいんです。そこであの地震ですよ。向こうのお母さんが、火をつけようとスイッチをひねったところで、ドーンときて、慌ててその手をもとに戻したそうです。あのままだったら、あの文化住宅は丸焼けでしたね。

お母さんが、孫をお腹のところに抱え込むようにして、うずくまっとったんです。二階の流しの部分がちょうどスポッと二人の上にかぶさってきて、助かりました。嫁は冷蔵庫の下敷きになって、死亡推定時刻が五時五十分だったから、即死でしょうね。

助け出されたとき、幼い孫はおしっこも便ももらしてるし、泣く気力もなかったみたいです。どこかの女の人のパンツを借りて、近所の人が持ってきてくれた布団にくるんで、息子がここまで連れてきました。道すがら、

「パパ、助けてくれて、ありがとう」

と言ってたそうですから、よっぽど怖かったんやと思います。

孫はたまに、ボーッと口開けて、考えごとをしてるような時があります。ふだんは明るいんですが、急にパッと表情が変わって、

「ママ、死んじゃったの……」

と言うて、泣くでもなくボーッとしてます。

夜中など飛び起きて、ママ、お花畑でねんねしてる、言うて、長いこと座って外見てます。近頃はおねしょもするようになり、やめなさいって言うんですが、歩きながら、ナムアミダブツ、ナムアミダブツ……なんて言ったりするんですよ。

この間、仏壇をきれいに掃除しながら、

「おばあちゃん、おりこうにしてたら、ママ帰ってくるの？」

なんて……。ふびんで返事に困りますよ。

今、昼間は保育園に預けているんですが、園から帰るときなど、

「ママとここ来た」

日に二度ぐらいは言います。ああいう形で母親を亡くしたことが、何か悪い影響を与えるんじゃないかと心配です。

ほかの子はお母さんが連れてきてるのに、情けなくなる言うて、息子は孫をどこにも連れていきません。お母さん子やったし、息子にようなつかんです。あの子はここで、成人するまで私が見るつもりです。そして、あの子のためにできるだけ家庭を明るくしておこう、思うてます。

本当に悪かった

中学三年　小林美由紀

私は、この大震災で母を失った。地震が起きた日、お父さんが「お母さん帰ってくんのおそいな」と言った。お兄ちゃんもバイトが終わり、その三時間後に帰ってきて、お父さんとお兄ちゃんで、隣の下敷きになっている人を助けていた。そのころ、私と妹はお母さんが行ってた朝起き会場に行っていた。そこに、お母さんが下敷きとなっているとは知らず、そのまま帰ってきた。

その日は、私と妹で近所の友達の家に泊めてもらったが、そのころから私は三十八度の熱を出し、一週間も寝込んでしまった。みなさんに迷惑をかけてしまった。本当、かぜなんかひいてなかったら、水くみとか、お店にならんでラーメンなど買うことをしなくてはいけなかったのに、本当悪かった。

そして、十八日……。お父さんから電話がかかってきた。

「二人で夙川の警察署へ行って、朝起き会場へ行きなさい」

朝起き会場では、お父さんとお兄ちゃんとレスキュー隊で、お母さんを捜していた。私と妹は、ずっと見守っていた。今思うけど、なんでうちらも十七日に気づかなかったのだろうと。そして、本当、熱がなかったら、もっと一生懸命捜せたのにと。実は、十

七日の夜、もしかしたら、お母さんが下敷きになっていたりしてと思った。でも、そんなことあるわけないな、たぶん、友達の家にでも行ったんやろと思った。

十八日のお昼ごろ、お父さんが、友達の家にいた私を呼び出して紙きれをくれた。それにはお父さんの字で「お母ちゃん亡くなった」と書いてあった。お父さんは、言葉ではとても言えなかったのだと思う。

でも、それを読んだとき私はなぜか涙が出なかった。今も思う、なぜだろうと。冷たく寒い市民体育館に運ばれたお母さんの顔を見て手でさわった時、もうたえきれなくなり泣いてしまった。あのお母さん、いつも元気で優しく少し怖かったお母さんが冷たい顔をしているので……。その日は、私と妹とお父さんの三人でかわりばんこで寝て、一晩中お母さんにお線香をあげた。今、本当、みんなのためになれなくて悪かったと思う。本当にごめんなさい。

でも、そういうことは胸の中に入れといて、前向きに頑張っていこうと思っている。看護科の高校に絶対受かってやろうと思う。震災から今まで、お母さんがわりになって、私たちを支えてくれている親戚のおばちゃんが夏休みが終わったら、新しいマンションで息子さんといっしょに住むのでいなくなってしまうけど、家事もみんなで分担して、何もかも家族四人で、お母さんの分まで生きて頑張っていこうと思う。

一人死ぬも三人死ぬも一緒やッ

小学生の下の男の子と嫁はんが死にました。

朝方、ふと目が覚めて、子どもにふとんを掛けて寝ようと思ったら地震がきたんです。まだそんなに大きく揺れてなかったので、蛍光灯をつけてみんなを起こそうと思って、そこまでは覚えていたんですが、タンスが倒れてきて、気づいたら動くのは手首だけでした。

外に人の気配がすると、動く手でタンスをコンコンたたいて助けを求めました。それが聞こえたんでしょう、瓦礫と瓦礫の間から棒かなんかを突っ込んでくるんです。向こうはわからへんから、それが身体にブサッと当たって、痛いな、そこ腰や、そこは肩や言うてたら、瓦礫の向こうで、こっちが頭で、こっちが脚とわかって、引っ張り出してくれました。

しびれていて痛いかどうかもわからない、力も入らない。嫁はんや子どもを助けたくても、助けられない。上の子どもは自分ではい出てきましたが、下の子も嫁はんも、もうあかんかったんです。こたつは無事に残っていましたから、もし、こたつに入っていたら助かっていたでしょうに。

地震後は避難所で、飲んで寝て、飲んで寝てという生活の繰り返しです。もう、完全に生きる気力をなくしていました。夜中に、車が跳ね上がるほどのガタガタ道をぶっとばして、死ん

でしまえーッと、毎日のように走りました。

「一人死のうが、三人死のうが一緒や」

酒飲んでもぜんぜん酔えへん。避難所の学校へ帰ると、周りには一人も欠けずに無事な家族がたくさんおる。そんなん、見とられへんかったです。腹立ってきて、おられへんかった。酒飲むか、車走らせるかして、みんなが寝た頃に帰ってくるんです。家族団らんなんて、もう、うちにはないですもん。

死んでしまった下の子は、家族中で一番やかましかった。よく大人では思いつかないようなことをポコッと言って、みんなを笑わしてくれました。頭がごっつ切れて、反応も早い。よくしゃべりました。

嫁はんとは、去年、結婚十年目でした。大晦日の日に、指輪のバーゲンがあり、子どもら連れて見に行ったんです。でも、いいのがなくて、買わずに帰ってきました。あの時、無理にでも買ってたらよかったと後悔してます。

そんなしんどい毎日だったけど、中学の同級生が訪ねてくれたのは、嬉しかったです。被災者の名簿で嫁はんと子どもの名前を見つけて、あいつんとこちゃうかって、学校とかいろんなところ捜しまわって、電車もないのに訪ねあててくれたんです。寿司や紙コップ、皿やら持ってきてくれました。あれは、本当に嬉しかったです。

楽しいこと、見つけなあかん

震災の時、私は仕事中でした。グラグラッと揺れて、地震だと思った瞬間、ガラガラと建物がくずれ、あっという間に瓦礫の下敷きになっていました。出口を探して平行に這っていたつもりが、瓦礫の上に昇っていたんです。運がよかったんですね。

それから、必死で家に向かいました。暗くて何も見えませんでしたから、とにかく闇雲に歩きました。運よく、家にたどり着いて、ほっとしたのもつかの間、子ども達は外に逃げ出して無事でしたが、妻は落ちてきた壁の下敷きになっていてダメでした。逃げようと思ったんでしょう、布団がめくってありました。布団をかぶっていたら、まだましだったのではないでしょうか。

通りがかりの見知らぬ人に、妻が死ぬかもしれんと言ったら、よっしゃと、いつも通っている病院まで運んでくれました。それまで気づかなかったんですが、私も頭にかなり大きな傷をおっていて、顔面血だらけだったようです。看護婦さんが私のほうを手当してくれようとするので、私はいいからと妻を診てもらったのですが、先生には、もうダメだと言われました。そのあとで私も傷を縫ってもらい、学校の安置所に妻を運びました。

早く荼毘(だび)にふしてやりたかったんですが、なにしろ亡くなった方が多いので、火葬場の順番

争いがすごくて、うちの方が早かった、いや、うちやって、そりゃ大変でした。やはり誰でも一刻でも早くお骨を持って帰りたいと思いますから。

震災の時、仕事で妻と一緒にいなかった、そのことがどうしようもないけど、くやしくて、横におったら助けられたのにとか、よく考えました。何もかもしんどくて、一緒に逝けたらどんなによかっただろうとか。通院と手続きの毎日で、病院から帰る時なんか寂しくて、何のためにこんなことやってるんやろとか、楽になりたいとか、ずいぶん落ち込みました。

以前は三交替の勤務でしたが、家事もしなければいけないので、九時から五時の仕事に変わりました。収入も減り、経済的にも苦しいです。ずっと妻に頼りきりでしたし、今まで明日のことなんか考えたことなんかなかった。つくづく、妻の存在が大きかったと思います。

母親とちがって、私は子どもたちとあまり接してこなかったので、どう接したらいいのか、むずかしいですね。高校生の二人の子どもは、家にいてもしかたないと思うのか、友達と遊んでばかりです。そうでもしないと耐えられないのでしょう。二人が自分から離れていくような気がして、寂しいです。

だけどいつまでもこんな気持ちではいけないと、最近いいように考えようとしてます。十年たてば、なんとかなるやろう、今はとにかく楽しいことみつけなあかん、と思うてます。

火事や火事や、ぬくいなあ

家内は震災後五時間して救出され、病院で診てもらったときにはすでに亡くなっていました。葬式ができず、何とか荼毘にはふしましたが、花の一つも入れられなかったです。ただ、瓦礫の中にあった一張羅のスーツを着せて送りました。ボーナスの半分をはたいて買った、本当にきれいなスーツです。家内も気に入ってました。

あの日は、私もかなりケガをしてしまい、あちこちから血が出ている上に膝がつぶれて歩けなかったので、畳の上に乗せられて病院に運ばれました。そんな恥ずかしい姿をヤジ馬カメラマンが写真に撮るんですよ。頭にきて、なんのつもりやと、怒鳴ってしまいました。どういう感覚をしているんでしょうね。

病院にようやく到着して、自動扉の前に寝かされていましたが、ドアが開きっぱなしなので、風が冷たかったですね。普通なら重傷ですが、あの日だけは軽傷扱いでした。

それから避難所での療養生活に入りました。私の場合、ケガをしてしまったので、体を動かせんせいか、ことさら不確かな噂、情報の不足、マスコミやヤジ馬の心なさに翻弄されたように感じました。

地震の翌日、このあたりでガス漏れがあるという噂があったんです。みんなは避難していっ

たけれど、私は歩けないし、ここで死んでもいいやと覚悟を決めて残ったんです。そしたらそのうち、みんなが戻ってきました。亡くなった人たちの弔い方にしても噂が飛び交って、合同葬儀だとか、トラックに棺を乗せていったとか、いやヘリコプターだとか。

そのくせ避難所ではラジオもテレビもなく、出所の確かそうな情報が得られるのは新聞だけという状態です。その新聞も一部屋に十数人いるのに、全体に一部か二部、回し読みですよ。大きな記事だけ拾い読みするだけで回さなければならないから、当然、情報不足になってしまいますよね。

一方で、取材のために飛ばすマスコミのヘリの音がすごくて、話し声も聞こえないくらい。不愉快でした。マスコミの心ない取材の仕方はだいぶ批判されたようだけど、一般の人たちだって、おもしろ半分に写真を撮る心ないアマチュアカメラマンとか、相当でした。自分の家は無事だったからって、震災にあった場所に行って記念写真を撮ったり、近所の出火を、

「あー、火事や火事や。寒いから、ぬくいなぁ」

と消火の手伝いもしないで、人ごとみたいに見てましたよね。被災地を見ようというツアーまであったっていうんですから、ひどいですよ。

結局、何よりも助けられたのは、家内の友人たちの厚情でした。家内は気持ちが優しくて、人付き合いがよかったので。その人達が私達残された家族の面倒をみてくれました。

娘の最期の蹴り

夫と娘二人の四人で木造二階建ての一階に寝ていました。全壊でした。

一回目の揺れがきたとき、そのまま寝ようとしたら、本震がきたんです。夫のイビキが聞こえていたんですが、私が手を伸ばしたとたん、屋根が落ちて、それが聞こえなくなりました。手は温かかったけど動かないので、死んじゃったと思いました。

隣で一緒に埋まっていた長女も、足がどんどん冷たくなって、ダメだったんだとわかりました。その足をなでてやりながら、また家族になろうね、さようならと話しかけていたんです。すると長女の足が死後のショックからなのか痙攣して、私の胸を蹴ったんです。

その時とっさに、

「そんなことしたらお母さん死んじゃう」

と言ってしまっていました。言ったそばから、なんてひどい母親なんだろうと悔やみましたが、その蹴りでハッとなり、薄れかけていた意識が戻ってきました。この子の分も生きなきゃと思い直したんです。

意識がはっきりしてくると、はじめは感じなかった家の重さがどんどん増してくるのに気づきました。外から、誰かいたら声を出してくださいと聞こえてくるんですが声が出せなくて、

それでも唸ったら柱を取り除いてくれました。後は必死で出て、

「お父さんと長女がここで死んでいます」

と言ったことは覚えていますが、後はもうダメです。意識がもうろうとしてきて、柱の隙間から見えた空がきれいだったことしか覚えていません。

夫と長女は圧死でした。二人が死んだことに対しては、運がなかったなんて思いたくありません。悲しいときには泣きなさいなんていう新聞の投書がありましたが、腹が立ってきます。もちろん悪気があったとは思いませんが、泣いたら落ち込むし、力も出なくなるんですよ。いろんな後始末をしなくちゃならないから、泣かずに黙々と耐えたんです。

泣くというのは傷口を広げることでしょう。今は黙って、傷の血が固まるのを待っている状態です。それでも、心にちょっと隙間ができると、一人で泣いてしまうんですけど。

次女はしっかりしてきました。一人でも生きていける感じで、かわいくないなと思う時もあります。でも学校に提出する書類で何度も死亡届を見なければいけなくて、書きたくない、コピーしたいと言っているところをみると、あの子もつらいのでしょう。働かないと学校に行けないとわかっているので、土日にアルバイトして学費にあてるつもりみたいです。

あの子が以前のようにおっとりして、元の自分に戻った時が、私たち家族の本当の復興なのだと思います。

現実見つめてください

高校三年　七里吉彦

あの地震から早くも三か月が過ぎました。今マスコミは連日オウム真理教の捜査の模様を伝え、まるで、あの日の事など忘れたかのようにもみえます。

しかし、依然として避難所は仮設住宅に入居できないでいる人たちであふれています。そしてたとえ入居できたとしても、一年後には住む所を新たに探さなければならないという現実が待っています。家だけでなく、今まで生活を支えてくれていた人がいなくなった現実は、つらく厳しいものです。

少し前、私と同じ避難所の男の子が高校に受かったと大喜びしていました。この悪条件の中で合格するという、ものすごい精神力に感心するとともに、ある新聞記事を思い出しました。

それはこの地震で親を亡くし、進学を断念する子供がいて、その中には、あしなが育英会の奨学金の存在を知らなかったという子供もいるという記事でした。この記事を見て、本当にショックを受けました。本当に学びたいものが学べない現実……。みなさん、どうかこの現実をしっかり見つめてください。そして、この現状が一刻も早くよくなるよう応援してください。

作文集

とってもくやしい

小学五年　銘田真奈美

一月十七日のじしんから、もう二ケ月がたった。
「神戸の町には、じしんはこない」と思っていたのに、じしんがきた。
十七日の日、ねているといきなり「ゴゴゴー」の音がした。
私はおもいっきり家ごとゆれた。こわかった。だから、ずうーっと目をつぶっていた。
じしんがおさまり目をあけると、外はうすく白かった。
目の前には、電線があり、何が何だかよくわからなかった。
妹をおこして外に出た。
しりあいの人に会い、おばあちゃんの家へ連れてってもらい、終わった。
明るくなるにつれて、ヘリコプターが、私の上空を飛び回っていた。
むかついた。人のことだと思って、と思った。
そして、家を見ると全かいだった。とても、とってもくやしい。
お母さんは、じしんのおかげで死んでしまった。泣きまくった。今でもくやしい。
「お母さんを返せ！」とさけびたい気持ちが、ずうーっとまだ残っている。

自分の子と同じに扱えない

私はみどりちゃんの伯母です。

みどりちゃんは小学生でお母さんと妹を亡くしました。

地震後、学校で作文を何度か書いてますが、回を重ねるごとに当時のことが詳しく書かれているんですね。口では言わないけれど、時がたって、ようやく書けるようになったのかもしれません。

震災前は内気な子で、登校拒否になっており、家で食べてばかりいたために太っていました。でも、震災からしっかりしてきて、今は勉強もみんなに追いつこうとがんばっているようです。身近な人の死を初めて経験して、しっかりしなきゃと思ったんじゃないかしら。

地震の時、みどりちゃんのお母さんは低血圧で起きられず、そこに地鳴りが聞こえて、タンスが踊りはじめて、壁にひびが入って、柱にひびが走って……、そして天井が落ちてきた。

親子で同じ部屋に寝ていたんですが、みどりちゃんは学習机の横に、お母さんと妹はタンスの前に寝ていたそうです。みどりちゃんは机の隙間で助かったんですが、タンスはお母さんの上に倒れ、その上に天井が落ちてきたため、どうすることもできなかったみたいです。

でも、みどりちゃん、みどりちゃんと呼ぶ声を聞いたらしいんです。天井が崩れてきた時に、

「ウッ」

と言ったっきりだったみたいです。呼んでも返事はないし、お母さんがかぶっていた毛布をひっぱってもびくともしない。それでもみどりちゃんはずっと遺体のそばで泣いていました。そこに近所の人がきて、一緒に連れてきてくれたと言っています。

みどりちゃんは震災前から父親がいなかったので、私が引き取りました。

すごくつらいのは、みどりちゃんと自分の子をどうしても同じようには扱えないということです。一週間ぐらいならなんとかできても、期間が長くなればなるほど難しいんです。

震災以来、私たち家族だって水入らずになれなくなっているわけだし、たとえ私の実の妹の子でも、自分の血を分けた子と同じには扱えません。言葉がけがどうしても違ってくるし、そういう私達の気持ちは、長く生活すればするほどごまかせるものじゃないんじゃないかと思います。

私の子どももみどりちゃんがきてから、べたっと甘えなくなってしまいました。子どもは子どもなりに気を使ってるみたいです。私は精神的に疲れてきて、朝起きて、がんばれる、がんばろうと思える日もあれば、朝からずうっと泣いてる日もあります。こういうつらさは同じ体験をした人にしかわからないでしょうね。もしそういう人がいたら、ぜひ教えてほしいです。手紙のやりとりでも何でもいい、お互いの悩みを話し合い、助け合いたいんです。

私が死んでいたほうがよかった

私が死んで妻を残さなあかんかったと思います。本当に……。

あの日、二階に寝ていたらグラグラッときて、布団から起きて座ったまま一分ぐらい身動きができませんでした。その瞬間、何が起こったんかとわけがわからなかったです。本当にすごかった。外に出ようとしたら襖がゆがんで開かない。十分ぐらいかかって、やっと襖を突き破って外に出たら、もう一階がないんですよ。

妻も高校生の娘も両方ともあかんのではととっさに思いましたが、近所の人とみんなで名前を呼んだら娘の声がして、手が見えてですね、引っ張ったらスーと出たんですよ。

妻の方は呼べど叫べど声がないんです。二階の床をめくって柱をのこぎりで切って、やっとの思いで見つけ出して外に出しました。連れていった病院は、ケガをした人や毛布にくるまれた人でいっぱいで、もうそれこそ戦場みたいでした。妻はいくらゆすっても呼んでも反応がなくて……、八時過ぎには、お寺に遺体を置きました。

私には寝たきりの親父がいるんですが、妻はよく面倒をみてくれましてね。俗にいう下の世話とかね。また、私の兄弟はよく遊びにきて夜遅くまでいるんですが、妻は顔色一つ変えず、いつもニコニコしながらつきあってくれましてね。私が女だったらまねできないですね。

妻が亡くなって娘と二人になったでしょう。母親だったら、女同士で何でも話せるんでしょうが、男親はダメです。娘はお母ちゃん子でしたしね。

私は、子どもは何でも親についてくるものとばかり思ってましたら、全然ダメなんです。妻が亡くなる前は、家族で外食に行ったりしたんですが、今はどこかに行こうと言っても断られます。なかなか女の子は気をつかいますね。お母ちゃんの話をするのは二人ともつらいですしね。話題がないんです。テレビ一つにしても、見る番組が違いますし、聞いている音楽も全然わかりません。娘が部屋のドアを閉めたらもう終わりですわ。出てきません。男の子みたいにパーとドアを開けるわけにもいきませんし、困ったもんです。

食事も私が作ったものは食べないんですよ。一人でホカホカ弁当を買ってきて食べたり、外食ばかりしてね。それで、私がちょっと叱るでしょ、そしたら、言えば言うほど逆らうんですよ。女の子を育てるのがどんなに大変なのか、やっとわかりました。

これまで葬式や初盆やら、いろんな手続きもあってバタバタしてましたが、このごろようやく落ちついてきまして、これからは仕事をがんばって生計を立てていかなくちゃと思っています。でも一方で落ちつけば落ちつくほどつらいという面もあります。娘がいてもほとんど話もしないし、なぐさめられるより、かえってつらくなるばかりです。

僕らのお金で学校これとんやで

今度の震災で、たった一秒か二秒のことで、ほんま家族が狂ってしまいました。私は娘を失い、残された小学生と幼少の子ども二人を引き取りました。この子らの父親もはじめは一緒に避難生活をしてましたが、三月中旬頃から会社に泊まるようになり、今は九州へ行ったきり、手紙一本、電話一本ありません。

母親は死んでしまうし、父親には見捨てられるし、子どもたちはほんとかわいそうです。下の子が手紙書いたんですが、どこへ送っていいのか、わからないんです。残酷ですね。会社に聞けば居所はわかるんでしょうが、もう清算してくれと言ってるんです。あの子らが大きくなって、しっかりした意思があれば連絡するでしょう。私は諦めました。私らがしっかり育ててやろうと思います。

ただ、全壊した娘たちの家にはローンが残っていて、お金は父親が全部持っていったので、連帯保証人の私が支払うことになってしまいました。今はとてもそんなもの払えないので、利子だけ入れている状態です。

下の子は、私に甘えてそばを離れません。四月でしたか、窓のところを見ては、

「ママが来てるよ、おばあちゃん。がんばりよって言うてるよ」

って毎日のように言うんです。で、田舎ですからカラスが多いでしょう。

「カラスがまよちゃんの肩にだけとまるの。ママが来たのかなあ」

四月、五月は、ずっとそんなことを言ってました。震災前に、二人で小さな貯金箱にお金を貯めて、いっぱいになったらディズニーランドに行こうって話し合っていたらしいんです。それで、この間、あしなが育英会からディズニーランドへの招待を受けた時、私が、

「まよちゃん、ママがディズニーランドに行けるようにしてくれたんとちゃう」

と言うと、

「そんなん、おばあちゃんと行くよりママと行く方がずっといいわ」

って言われてしまいました。母親のことが恋しくて仕方がないのでしょう。

上の女の子はあまり言いません。ストレスがたまってくると、自分一人で部屋に入ってバンバン壁をたたいたり、ワーと大きな声で、ママがなによって言ってます。

転校先で、

「おまえらな、僕らのお金で学校これとんやから」

と言われたみたいで。二、三人が言っただけのことだとは思いますが、子どもは子どもなりに傷ついているようです。

お母さんが死ねばよかったんだ

娘は自力ではいだし、息子はすぐに助け出されましたが、私と夫は埋まってしまいました。何とか二人とも出してはもらったんですが、夫は翌日、病院で亡くなりました。

震災後の整理から葬儀まで、すべて私の姉にやってもらいました。今は、その独身の姉のところに子どもたちと寄せてもらっています。私は働いていませんから、恥ずかしいことですが、姉のお金と神戸市からのお金と児童手当で生活しています。

今も病院に週一回は通っているんです。でも、ほとんど家にいるでしょう。毎日毎日、ボーッと過ごしているんです。いろいろなことを思い出します。私、気が弱い方なので、姉によく叱られます。

「私の老後のために貯めといたお金を、何であんたのために使わんとならんの」

と言われてしまいます。

私の足は今も治っていません。骨に異常はないのですが、筋肉と神経が壊死してしまっています。医者にも初めての症例で、治る見込みがあるのかもわからないんです。

震災直後、私は病院を三つも転々としましたので、子どもたちにはつらい思いをさせました。娘はおじいちゃんとおばあちゃんの遺体と他人の遺体がいっぱいあるところで、震災の日を過

ごしたんです。

それから何か変わりましたね。二人とも転校しましたが、娘の方が登校拒否ぎみでして、中学校の入学式の後、二、三日したら学校に行かなくなったんです。二つの小学校から集まっている中学なので、ほとんどみんな知り合いのようで、中に入れなかったようです。

やっと行けるようになったとたん、今度はいじめられて、また行かなくなってしまいました。担任の先生も知っているらしいのですが、何も言ってくれません。

この前、三者面談があったのですが、この成績では一学期はおおめに見ますが、二、三学期は……と言われました。あと二年もしたら進学も考えなければならないでしょう。かといって塾に行かせるお金もないし……、頭、痛めてます。

小学生の息子は何とかやっていますが、おじおばに、

「もし地震が来たらおじさんは僕を連れて逃げてね。おばさんは鳥を持って逃げてね」

と言ったそうです。ゲームセンターで、すぐにこづかいを使い果たすようになり、心配です。

「神戸に生まれなかったら……」

「お父さんじゃなくて、お母さんが死ねばよかったのに」

息子は私に言うんです。本当、私の方が死んでた方がよかったですね。ダメな母親だから。足が痛いと、つい子どもに当たってしまうんですから。

ごめんなさいお父さん

中学一年　山内亜喜子

地震の前の日お父さんにおこられた
私は好き嫌いがひどい子
自分の好きなものしか食べないわがままな子
地震の前の日お父さんが作ってくれた「水たき」も
私が食べやすいようにと
いっしょうけんめい工夫してくれた
「食べたくない」と言っておこられた
いやいやで食べたけど味はけっこうよかった
私は今反抗期
でもなおそうと思えばできた
おいしかったら素直によろこべばよかったのに……
そうしなかったのがいまとてもくやしい
ごめんなさいお父さん

作文集

もう食えない手料理

高校二年　萩本康雄

十七年間親子ゲンカやいろんなことで迷惑かけた
それももうこれからはない
オレは頭が悪かったから
県外の高校へ行って寮に入って高い金を出してもらった
何度も「仕送りくれ」と電話して困らせた
帰省するたびやさしくしてくれたのに
オレは冷たくあたった
うっとおしくて自分の部屋に閉じこもりしゃべりもしないで
金だけもらってさっさと寮に帰った
あのときは別になんとも思わなかった
今は親不孝だったなと思ってる
おふくろはもういない
手料理ももう食えない
いくら悔やんでもおふくろはもう二度と帰らない

いろんなことを避けるから生きていける

妻と長男と甥の三人が亡くなりました。次男は試験を控えていたので、あの時間にはもう起きていて、一番よく震災のことを知っています。揺れた時に、ベッドの下に隠れたので助かったのですが、同じ部屋にいた長男はベッドで寝ていて、上から屋根が落ちてきて死んでしまいました。次男はその様子を見ていましたが、本人からその時の様子を直接聞いたことはありません。最初は長男も生きていたようで、次男の名前などを呼んでいたようです。妻の頭にはタンスが倒れてきて、頭が陥没してしまっていました。

一番気掛かりなのは高校生の次男です。なかなか話ができなくて、どこまで立ち直っているのかわかりません。写真などがまだ整理中で、本当なら一緒に片づけができたらいいのでしょうが、まだ無理なようです。私でも思い出して悲しくなってきます。いろんなことから避けてきているから、生きていけるといった状態なのでしょう。

先日も先生と話をしましたが、無気力だと言っていました。もともと引っ込み思案な性格がよけい強くなった感じです。友だちも中学から一緒に高校に行った人たちと、あいているマンションの部屋に来てファミコンなどをしています。そこでも、次男だけで自分の部屋にいることがあったりしました。友達の中には、中学時代からの親友で、もともと父子家庭の子がいて、

私もそのあたりは気が楽です。その子の父親とは高校で一度話しています。

前だったら、妻やにぎやかな長男がいて、ワイワイしていたのが、その相手がいなくなって、年いった私の母親と私しか話し相手もいないから、かわいそうなんですね。

二学期になれば、大学進学に向けて選択科目を決めたりしなければならないのですが、まだ何も話をしていません。学校の成績ももう落ちるところまで落ちたので、このまま気持ちがズルズルいかないでほしいですね。気持ちが滅入ってくるので、どのように勉強などに気持ちを向けてくれるかですね。

浪人してでも大学行くかと聞きましたら、わからんと答えていました。次男が好きな道に進んでくれればいいと思いますが、まったく白紙のようです。

私としては、あしなが育英会のような、同じ思いをした子どもの集まりに出ていくのがいいと思いますが、それを無理に行けって行かすのがいいのか迷います。

学校の先生と話してもダメですね。お前の気持ちはわかるけど、がんばらないといけないぞと言われるのがオチです。これまでは震災だったので特別だけど、これからはみんな一緒だよ、といった感じです。だから学校はあてにしていません。地域の人に温かくしてもらう方がいいですね。学校とかに思いやりの気持ちがあるかどうですかね。

八千万円が八百万円になってしもた

家内は頭から背中にかけて、大きな梁を受け止め、くの字型になって亡くなっていました。近所の方が遺体を毛布にくるんで出してくれ、車の後部席に夕方まで寝かせました。

まったく情報が入ってこないんで、国道まで出て行き、交通整理の警察官に家内の死を告げました。死体安置所に連れていくように言われましたが、警察官本人もその場所がわからず、どうやって行くんだと混乱しました。検死のため安置所へ連れて行くと、警察官が三階まで家内をあげてくれました。その日は何も食べずに夜を明かしました。

検死の時、発電機の匂いが避難所に立ち込め、一時中止となり懐中電灯で行ったため、翌日の十二時半にやっと終わりました。三階から一階へ遺体を下ろすのを警察官に頼んだら、自分で下ろしなさいと言われたので、一人では下ろすことはできないと答えると、家族を呼びなさいと言われました。おまけに、遺体は救急車か霊柩車で運べ、それも、自分で捜せ、そうでなければ法律に違反すると言われました。この非常事態の中で、法律通りにやれ、ダメなものはダメと言い張る警察官に怒りすら感じました。

やっと機動隊の方に下ろしてもらい、旅立つ前に、最後に我が家を見せたいと思ったので、実家に連れていく前に全壊したわが家へいったん戻りました。

ガレージで十日間過ごしましたが、余震に脅え、なかなか眠れませんでした。今でもバスの振動で外に飛び出ますし、毎朝五時になると目が覚めてしまいます。唯一励まされたのは、患者さんからの診療再開の確認の電話です。私にもやらなければいけないことがある、勇気と自信が生まれました。

診療所のあるビルも半壊し、ガラスは割れ、床全体にヒビが入り、ひどい雨漏りです。周辺も焼きただれていました。診療できる状態ではなかったけれど、天井にビニールシートを張り、二月六日から診療を再開しました。患者さんは待合室でも傘をさして待ってくれました。腐った天井には、青や赤や白いカビやキノコみたいなものが生え、不思議な気持ちでした。

一日百五十人ぐらいの患者さんが来てくれます。どれだけ心の支えになっているかしれません。

今は診療所と生計を立て直すことが第一だと思っています。総理大臣がお金を貸すと発表した時、診療所再建のために八千万円借りるつもりで銀行に行きました。ところが二千万円しか貸せないと言われ、その手続きのために一カ月銀行へ通いました。

予算書を出せと言われても、半壊状態のビルですから予算の立てようがありません。結局、運転資金として八百万円だけ貸しますと言われました。現実は厳しく、八千万円が八百万円になってしもたとの思いです。行政に不信の念を抱きました。

呻きとともに返事がなくなり…

私の家は、昭和の初期に建てられた木造二階建てでした。母屋の一階にはリビングなどがあり、二階は全員の寝室になっていました。

二階の南の部屋は長男の寝室で、家の真ん中の壁にベッドをピッタリくっつけて寝ていました。

次男は長男の北西の部屋で、窓ぎわにベッドをくっつけて寝ていました。私と家内の部屋は北東で、次男の部屋とはもともと一つの部屋で、障子で仕切ってありました。

次男の部屋には障子にくっつけて大きな本棚が置いてありました。障子をはさんで、私たちの部屋には小さな整理ダンスです。そして整理ダンスと平行に家内が寝ていました。そしてガッシリした和机、机をはさんで私が寝ていて、大きな床の間があります。床の間には大きなテレビが置いてありました。

地震が起きて、海の方からグォーという音が聞こえ、家内は、お父さん、お父さんと私を起こしました。家内の叫び声で目が覚め、その瞬間、すぐに家が崩れてきました。家内は起き上がろうとしましたが、無理のようでした。壁土やら何やらがどんどん落ちてきて、私は目を開けることができませんでした。ただただじっとしていました。

私が寝ていたところは建物の隅でもあり、右手が床の間でしたので、大きなものはあまり落ちてきませんでした。また、左手の和机が空間をつくってくれたのも幸いでした。

ところが家内のところには小さい整理ダンスと次男の部屋の本棚が倒れ、さらに梁などが落ちてきて、埋もれてしまい、ウーンと言ったきり、返事がなくなりました。一時間ぐらいたって助け出されたときには、すでに脈が止まっていました。

次男は窓側に寝ていましたので、二十分ぐらいたってから自力で脱出しました。長男はかなり埋もれて、苦しい、苦しいと言っていました。助け出され、今は会社の社宅にいます。

次男は受験生で、震災が起こるまでは、先生にも国立に受かるだろうと言われていましたが、震災後はボーッとしてしまったので、こりゃダメだと思いましたね。お母さん子で、一日中何するでもなく、ボーッとしてました。そんな子に受験だからといってガンバレ、ガンバレとあまり言ってもかわいそうですし、とりあえず、テストだけは受けに行ってきなさいと言いました。結局、今は私立大です。

私より少し年上のお年寄りの夫婦を見ると、たまらなくうらやましく思います。一人での外食も、寂しさを感じます。これから一生、ああいう夫婦一緒の光景に自分が立てることはないんだなあ、寂しい人生になるなあ、と、気持ちが沈んできます。

また泣いとん、なんで泣いとん

めぐみちゃんは三年前から私たち伯母夫婦が預かっています。めぐみちゃんの実父は、私の弟になります。めぐみちゃんは弟のことをパパと呼び、私達のことをお父さん、お母さんと呼びます。弟は高卒で働きだして、震災時は会社を経営していました。アパートで犬二匹と住んでいたんですが、圧死で亡くなりました。

震災前には、月に二～三度、めぐみちゃんに会いに来て、動物園や遊園地に遊びに連れて行ったりしていました。パパはめぐみちゃんに会うことをいつも楽しみにしていました。

めぐみちゃんの母親は生みっぱなしで、パパが生きている時からほとんど面倒を見なかったので、私達が育ててきたようなもんです。パパが亡くなって母親は保険金や見舞金などは全部自分が受け取っています。でもめぐみちゃんに服の一枚も買っていません。今までのことも一切知らんぷりです。

震災直後、めぐみちゃんは、ちょっと変な言動が多くなりました。パパの絵は、黒マジックで黒枠を書き、長髪で暗い顔ばかり描くようになりました。震災までは、電話を取っていたんですが、急に取らなくなりました。ラジオで時報が鳴ると、今何時かとしつこく聞くようになりましたし、テレビでニュース速報が流れると、必ず、

「じしんやでー」

と、叫ぶんですわ。それにパパの話になると、もうええかげんにしとき、とか言いながら話をそらしにきます。私の姿が見えなくなると反狂乱になり、頭を床にぶつけるんです。

わが家には仏壇がないので、パパの遺影を置いています。私が遺影を見ているとめぐみちゃんが寄ってきて、

「また泣いとん、なんで泣いとん」

と、声をかけてきます。めぐみちゃんも遺影を見ながら、ひとり言のようによく話をしています。自分の誕生日に、

「パパ、ケーキいっ～ぱいもってきてくれるかなー。でもパパおそらにいったからこないかな」

なんて切ないことを言っていました。

でも今は、少しずつですが、落ちついてはきているようです。パパはと聞くと、

「てんごくにいってもた」

自分なりに、父親が亡くなったことを認識しているように思います。

主人は五十七歳で、あと三年で定年です。定年後を考えると不安でたまりません。でも、めぐみちゃんの笑顔を見て私たちががんばらなあかんな、と話しています。

「笑顔」で死んだ父さん

高校三年　山田　愛

私はどちらかというとパパっ子だった。そんな私を父さんは姉ちゃんよりもかわいがってくれた。よく二人でボーリング行ったね。

病院におる時、「元気になったら、またボーリング行こな」って言うたん、覚えとう？病気らしい病気なんて全然せんかったし、はじめのうちは意識がはっきりしとったから絶対助かるって思っとってんで。なのに、急に力尽きてんね。苦しかったやろ？　やっと楽になれてんね。

父さんの死に顔が「笑顔」だったことが、うちら三人の救いやわ。

あれから何度か、父さんの夢見たよ。夢では全然しゃべってくれへんねんけど、生前とかわらず優しいね。起きた時、涙出とったわ。

「父さんはもうおらへん」てわかってても、時々、ふと帰って来そうな気がする。うちの部屋には、父さんが買ってくれたものがいくつかあるんよ。今まで全然気にせんかったけど、これからはもっと大切にあつかいます。

ほんまに、父さんにはわがままばっかり言っとったね。ごめんね。そして、ありがとう。これからは父さんの分まで頑張って生きていきます。

よう見とってや

大学四年　吉岡裕晃

あんな地震が起こるなんて思ってもみなかった
こんなことが起こると分かっていたらもっと母親孝行したかった
母は五年前重い病気にかかった
それでもとても元気になったのに何であんな地震ぐらいで死んでしもたんや
息ができなくて死ぬのはものすごく苦しいことなんやろう
同じ死ぬんやったらあんな恐怖は味あわせたくなかった
前の日、母は朝から夜遅くまで働いていたから
母とかわした言葉っていうのがないんや
馬鹿なことでもいいから何かしゃべっておけばよかった
それがごっつい心残りだ
親父は気が短かなってたばこもよく吸うようになった
母さんの分もできるかわからんけど
親父を大事にしてみる
天国でよう見とってや

死んだら、あかんなあ

母親が急にいなくなったでしょう。だから寂しさはあったでしょうね。まだちっちゃいのに、明るい性格だから、人前では健気に見せないんです。こちらにいるうちは平気なんだけど、あそこの大きな道を越えるとね、お母さんとこ行こう、家に帰ろうって言うんですよ。ここではちっとも言わないのにね。

時々、この子達が住んでいた家に荷物を取りに行くことがあるんですが、この子だけおいとけないし、一緒に連れて行くでしょう。そうすると、

「お母さんやお兄ちゃん、死んだの？　死んだらあかんな」

夜は、やっぱり思い出すらしく、時々ね、おばけが出て怖いと言ったり、お月さんを見て手を合わせたり、ちょっと情緒不安定になったりしました。でも今は保育園で遊び友達ができて、ずいぶん緊張もとれて、のびのびしてきました。

私もこの年で孫の育児をしなくちゃいけないとは、思ってもみなかったです。今までは朝早い勤めだったんですが、勤務時間を変えてもらったんです。育児は、ほんと、大変。やっと自分の子どもに手がかからなくなって、やれやれと思っていたのに。

自立可能な人たちは自立すべし

自宅再建の費用、二千五百万円は頭が痛いです。私はもう年ですから、息子が二十五年ローンを組みました。子どもに家を残すどころか、借金を背負わせたことには、本当にすまない気持ちでいっぱいです。

仮設住宅を郊外にたくさん建設しすぎて空き家が多いのは問題ではないでしょうか。土地がないなら、二階建てにすれば有効利用ができるし、そもそも空き家は税金の無駄遣いだと思うんです。

また、公園でテントを張って生活している人たちを早く何とかしてもらいたいですね。電気は勝手に電線から引き、水道も無料、義援金をもらい、食料さえ最近まで配給されていて、私のように賃貸でも生活できるぐらいの資金を持っているはずですよ。

中には震災後に百万円以上貯金した人もいるそうです。本当に避難所を動けない人はごく少数ですよね。自立できる人たちは強制的にでも自立させるべきです。

行政は本当に行き当たりばったりの投資しかしていません。震災遺児だって進学したくてもできない家庭はたくさんありますよ。

お父さんにもらった命、がんばらなあかん

私たちが住んでいた借家は、かれこれ七十年近くたっていたんです。奥にある隣の家が倒れてきて、それにつられてうちも全壊でした。

一階の、一方が主人と長女、そしてもう一方の部屋に下の二人の子と私が、襖を隔てて寝ていました。梁が脚の上に落ちてきて、私は下敷きになりました。そして、さらにその下に、三女の脚をはさんでいたんです。夫は、長女を助けた後に私達を助けにきてくれたんですけど、柱にはさまってしまって。

主人は自分のことよりも、私や子どものことをまず考えてくれる優しい人でした。子どもが全員女の子ですから、とても可愛がっていました。思い出もいっぱいです。

長女は私に気を遣ってか、主人が亡くなったときも泣きもしないし、今でもあまり主人のことは言いません。たぶん自分が泣いたりすると、お母さんが困ると子どもなりに考えたんでしょうか。それに子どもたちの方が結構立ち直りが早いみたいです。

今も脚がしびれていて、週二回はリハビリに通っています。でも、あの時主人がこっちの部屋に来てくれなかったら、私と二番目、三番目の子は駄目だったんです。だから、お父さんに助けてもらった私達は、力合わせてがんばらなあかんと思ってます。

短くても中身の濃い人生や

その日、下からドーンとすごい突き上げがきて、メリメリと音がしたと思ったら、天井が落ちてきて、あっという間に下敷きになり、腰の上には二階の家の便器が乗っていました。無我夢中でしたが、自力で脱出することができました。息子は目や鼻にまで土壁をビッシリ詰まらせて発見されましたが、コタツが上に乗っていたので助かりました。でも、家内と娘は発見された時、すでに脈はありませんでした。それからは時間の感覚もなくなり、震災から一週間は一睡もできませんでした。今でも、夜中にふっと目がさめることがあり、そうするといろんなことが浮かんできて寝つけません。

家内も娘も、生きた長さは短くても、その分中身の濃い人生だったんでしょう。娘は小さいころから注目をあびることが多く、家内も人脈が広く、充実した毎日を過ごしていましたから。今では、二人とも死ぬるべくして死んだんだと思うようになりました。でも、訪ねてきてくれた親戚の人達が帰った後などは寂しさがこみ上げます。これは人を亡くした時の悲しみとは別のもののようです。

町を歩いていると、家内と甲子園駅から芦屋までを歩いた時の様子とかが思い出されるんです。私にとって、家内との二十三年間こそが、自分の人生だったんですよ。

小さな心も傷ついて

はじめ小さな揺れがきて飛び起きました。その後、ドーンと大きな揺れがきた時に家が倒れました。すぐ脇にいた幼い娘をかかえ込んだんですが、たくさんの壁土が顔のまわりに落ちてきて、もうダメだと思いました。

運ばれた病院では、立てるんなら大丈夫と言われて帰されましたが、一週間後検査をしてもらったら、背骨の下から三番目のところが圧迫骨折をしていました。壁土で傷口がふさがれていた頭も十五針縫い、即入院となりました。大阪の病院に親戚がいて、そちらに入院することになったんですが、その時、神戸に住んでいて大阪に帰ろうとしているおじさんと知り合いました。同じ境遇にいる人がいるんだと知った時は、とても心強かったですね。

子どもたちはデリケートになりました。娘は私と一緒だったので、そうでもないんですが、即死だった主人の脇にいた息子は、三時間以上独りぼっちだったからか、今でも余震にすごくおびえます。暗いところもいやがるし、私が通院で家をあけたりすると、帰ってこないのではとパニックになるんです。

またあまりの報道の取材に、カメラをまったく受け付けなくなりました。さらに経済的に不安を感じているらしく、お金を使わないようにって考えているようです。

もう、しんどい、ボロボロです

私、全然大丈夫よ、って強がっても、やっぱりダメなんです。半年以上がんばって、がんばりきって、がんばる力がもうなくなってしまったの。

他人にしてもらうことなんてないし、助けてもらうこともない。がんばれって無責任に言われても、何をがんばればいいんでしょう？

ただ、もうしんどい、ボロボロです。今、カウンセリングを受けています。半年たったころから調子が悪くなる人が多いそうです。趣味や仕事などで気晴らしでもすればいいんでしょうけど、やる気が出ない。食事も出前や外食が多く、買い物をする気力すらないんです。子ども達に何もしてあげられない。

この間、精神的に不安定な次男が、僕の父さんは地震で死んだんだって自慢気に話しているのを聞いて情けなくなりました。

「そんなこと言ったら、お父さん悲しむよ」

って言うと、お父さん、悲しませたくないと言って泣くんです。私だって、本当は泣きたい。気持ちの整理がつかないんです。子どもたちはふだんは明るく振る舞っている感じです。でも心の中ではやっぱり泣いているんだなって思う時があります。

子どもの頼もしさに支えられて

一度目の揺れで起きると、寝ぼけていた目に、あたりは真っ白に映りました。そして二回目に縦の揺れがきた時に、あわてて持っていたふとんを妻に掛け、その上に私が覆いかぶさりました。

その直後に妻の「ギャーッ」という叫び声が上がったようでした。その後はなんとも応えないので、もうダメだとわかったんです。

そう思うと、自分もこのままでいいかと、あきらめの気持ちになっていました。そんな気持ちを吹き飛ばしてくれたのが、私と妻を捜して叫んでいる、子ども達の声でした。それまでは子ども達のことを考えていなかったみたいです。

子ども達は人からよくがんばりと言われるらしいんですが、私はがんばらなくていいと言ったんです。だって震災はもう起こってしまったんだからしょうがないし、たとえこのことで受験する高校のランクが落ちたって全然構わない。この震災で、それ以上の貴重な体験をしてきているんだから、それで充分だって。

本人たちは、結構冷静なようです。長男は、自分より、親父の方が心配だと先生に言っているそうです。頼もしくなったなって思います。